
全てを零へ・・・ ～Prerude of Zero～

木林 止

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全てを零へ・・・ ～Prerule of Zero～

【Nコード】

N5434Y

【作者名】

木林 止

【あらすじ】

希望、堕つ……。彼等の存在は、なくてはならないものだった。しかし、運命は残酷にも彼等の存在を奪っていった。奪われた者たちが悲しみに暮れながら、それでも時は過ぎて行き・・・物語は動き出す。

そこに一人の青年が、クロスベルの大地を踏みしめるのだった。

このお話は、原作でロイド達が全滅した後から歴史改変が行われるまでの過程を妄想したIf小説です。

オリキャラがメインとなり、原作のメインとなる支援課4人組は作

中に登場しません。
思いつき＋ラストしか決まっていなので、基本的にはスロー更新となります。

く終焉の鎮魂歌く

カタカタ

カタカタカタカタカタ

クロスベル通信社の編集室。

グレイス・リンは、号外の特稿文を端末に打ち込んでいた。
そのペースは一定に。

機械が自動でタイピングしているように一定に。

カタカタ

カタカタカタカタカタ

「どうして、こんなことになっちゃったんでしょうね」

背後から、カメラマンのレインズからの声。

その声には応えることなく一定に。

その問いには答えることなく一定に。

カタカタ
カタカタカタカタ

「街の人達からも信頼されてました。『彼らの様な人材がいるのなら、警察も捨てたものではない』と。」

その声はひどく虚ろ。

その声に相槌を打つこともなく一定に。
その感情を表に出すことなく一定に。

カタカタ
カタカタカタカタ……カタ

手が止まる。

「……仕方ないじゃない」

振り返ったその表情も虚ろ。
感情という概念が消失してしまった……そんな印象すら受ける。

「現実を変えられないわ。そして、私たちにはどうすることも出来なかった」

そう、戦う力のない自分達ではどうすることも出来なかった。警察でも、遊撃士でも、警備隊でもない彼らには、ただ見ていること。

そして、空の女神^{エイドス}に祈りを捧げることしか出来なかった。

「私たちに出来ること・・・それは、出来事をありのままに、事実を曲げずに伝えることだけよ」

そう。現実を変える力がないのなら。現実に向かえる力がないのなら。せめて、その現実を歪めることなく、大衆に伝えていく。それが、彼らの誇りであり、矜持。

「ですが」

3年前もそうだった。
なぜ、この人が、と。

そういう人物に限って、こういうことが起こるのだ。
不謹慎であるのは承知の上で。

もっと他に、そうなるべき人物はこの世界には沢山いるだろうに。

「ええ。彼らの活躍の記事、もう殆ど完成してたのに」

彼等は無力だった。だから、初めて会ったときに、期待を込めて意地悪な発破をかけた。

彼等は誠実だった。だから、どんな小さな依頼でも、常に全力で当たっていた。

彼等は謙虚だった。だから、街の人達に信頼され、なくてはならぬ存在になった。

彼等は勇敢だった。だから、事件の解決を目指し、？その場所？に乗り込んでいった。

「どうして、こんなことになったのかしらね」

その疑問に答えるものはない。

その言葉は空中に霧散していった。

「はは。・・・ざまあないな、セルゲイ」

特務支援課ビルにある一室、執務室。

もたれかかるように椅子に座り、セルゲイ・ロウはそう自嘲した。
机の上には大量の酒。

床の上には大量の空き瓶。

いくら飲んでも少しも酔うことが出来なかった。

血の巡りがよくなった為か、銃創から傷口が広がり出血。
痛みはなかった。

そんなことはもう知ったことではなかった。

「・・・なんで、こんなことになっちまったんだろうな」

彼らが帰ってきたら、一人前と認めてやるつもりだった。

彼らが帰ってきたら、その祝いにとっておきのプレゼントを用意してやるつもりだった。

彼らが帰ってきたら、さらに色々な仕事を経験させ、優秀な人物に育ててやるつもりだった。

それなのに。

「・・・俺は、また間違えちまったのか」

3年前もそうだった。

優秀な部下に恵まれ、毎日が楽しかった。

今回もそうだった。

未熟だが将来有望な部下に囲まれ、毎日が楽しかった。
それなのに。

「は・・・本当に、なんで、こうなっちまったんだろうなあ」

誰もいない特務支援課の一室で。

苦悩と。

後悔と。

絶望と。

様々な思いの渦の中で。

セルゲイは涙を流した。

クロスベル大聖堂裏手、共同墓地。

その墓前に、一人の女性の姿があった。

持参した花を供え、祈りを捧げる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その女性はとても美しかった。

しかし、その美貌は少しやつれて見えた。

あまり睡眠を取れていないのだろう。

実際の年齢より、10歳は年を取っているように見える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

眼前の墓は、彼女が愛した者達の寢床。

彼等は彼女の自慢だった。

彼等は彼女の全てだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一人は彼女の心の支えだった。

だが、その彼を失い、彼女はもう一人を支えていくことを生き甲斐とした。

だが、その実、もう一人の存在が彼女の心の支えとなった。
だが、その彼も失ってしまった。
彼等は警察官として、この街を守る為に生き、そしてその命を散ら
してしまった。

「・・・・・・・・・・」

祈りを終え、彼女は顔を上げる。
愛しく、寂しく微笑む。
彼等のことを思い返しているのだろうか。

「・・・・・・・・・・また、来るわね」

立ち上がり、そう呟く。
そして、彼女——セシル・ノイエスは、もう一度、その
墓を見つめる。
そして振り返り、歩いていく。
その墓にはこう記されている・・・

『ガイ・バニングス』

ロイド・バニングス
『ここに眠る』

くクロスベルタイムズ 号外より抜粋く

先日、古戦場跡『太陽の砦』内部にて死亡者が発見された。

死亡していたのは、ロイド・バニングス捜査官（18）、エリイ・マクダエルさん（18）、ティオ・プラトーさん（14）、ランディ・オルランドさん（21）の4名。

発見したのは、遊撃士協会のA級遊撃士アリオス・マクレイン氏と他2名。

アリオス氏によると、死亡した4名は所属していたクロスベル警察特務支援課と遊撃士協会の合同捜査任務中であつたという。

なお、この合同捜査任務はベルガード門警備隊とルバーチエ商会構成員によるクロスベル銃撃事件と関連性があると見られており――

〈終焉の鎮魂歌〉（後書き）

作者（以下：作）「とりあえず、このスペースでは支援課のメンバーに来ていただき、この小説の解説をしていこうと思ってます」

ロイド（以下：ロ）「いきなりやつちやった感全開な文章だな」

作「ええ、ただどーしてもオリキャラ小説がやってみたかったの
で」

ロ「原作準拠で、オリキャラを溶け込ませていくという発想は？」

作「やってみようとは思ったんですが・・・それは他の作家さんが面白いものをいっぱい書かれていますし、敢えて誰もやってなさそうな題材を使おうと思ひまして」

ロ「何か他にも色々構想はあつたって聞けるけど」

作「はい。ガイ編とか暗黒ロイドさんとか。ガイ編はさすがに資料少なすぎてほぼオリジナル小説になっちゃうから却下。暗黒ロイドさんは・・・まだ執筆を検討中です」

ロ「つくづくイロモノが好きなんだな」

作「そうですねえ」

追記：誤字があつたのでちよつと修正しました

ついでにサブタイトルもちよつと変更しました

く来訪の異邦人く

「フフ・・・フハハ・・・」

男は感激していた。

何回も。

何回も。

何回も。

気の遠くなるほどの失敗を繰り返し、ようやくその奇跡を起こすことができたのだ。

「やった・・・やったぞ・・・」

体が喜びに打ち震える。

頭の中が真っ白になる。

眼から勝手に涙が流れる。

「これでようやく我等の悲願が達成される・・・」

薄暗い部屋の中で。

夥しい鮮血の中で。

大量の死体ガラクタの中で。

「我等の御子の誕生だアアアアアアアアアッ」

ケタケタ。

ケタケタと。

その『完成品』の前で嗤い続けた――

カ
タ
ン
カ
タ
ン

カタンカタン

(・・・・・・・・夢か)

アルタイル発クロスベル行き列車の中。

青年——セレス・ランスターは目を覚ました。

どうやら眠りについてから、随分と時間が経っているようだ。

全身が汗でずぶ濡れで気持ち悪い。

クロスベルに着いたら、まず宿を借りて汗を流そうと決意。

『まもなく、クロスベル市に到着いたします。お降りの際は、お忘れ物にご注意ください』

アナウンスに従い、バックパックを開けて持ち物を確認。

荷物などはほぼ皆無だが、確認はいくらしておいても損はない。

財布。

着替え。

二振りの小太刀。

そして——遊撃士手帳。

「・・・・・・・・・・便利な物だな」

手帳を手に取り、そう呟く。

そう、これさえあれば。

身分証明、必要なミラ。

そして、何より必要な『情報』が手に入るのだ。

そこに記されているランクは——正遊撃士・Fランク。

セレスにとって、ランクなどは知ったことではない。

遊撃士でいること。

それは、目的の為の手段でしかないのだ。

カタンカタン

カタン・・・カタン

駅に停車する為、列車が減速を開始。

出した荷物を全てバックパックに収納。

窓から街を眺める。

（『探し物』・・・この街で見つかるというが）

リベール王国では見つからなかった。

カルバード共和国でも見つからなかった。

もし、クロスベル自治州でも見つからなかったら。

（その時は・・・別の場所を探すまでだ）

エレポニア帝国でも。

レミフェリア公国でも。

どこにでも探しに行く。

何故なら――

自分という存在の価値は。
その『探し物』の為だけにあるのだから。

遊撃士協会・クロスベル支部。
受付担当のミシェルは苛立っていた。

「まったく……。何でフランクの人なんて送ってくるのよ！」

そう、あの日から。

一月前、特務支援課が消滅した、あの日から。
ギルドに寄せられる依頼の数が、激増しているのだ。

それまでは、支援課の方に対応しきれない依頼を受け持ってもらい、何とか人材を回していた。

だが、今は全く人手が足りない状態である。

人探しという目的があるのにも関わらず、エステルとヨシユアも文句を言わず依頼をこなしてくれており、ミシエルは申し訳なく思っていた。

だから、それぞれの支部に、人材の派遣を要請していたのだが・・・どこの支部からも色よい返事がもらえず、ようやく手配がついたのが、アルタイル支部のその人物だった。

「セレス・ランスター、か・・・」

こちらにも、人材を育成する余裕などはない。

もし使い物にならなかつたら、すぐに他の支部に異動させてもらう。

そう決心するミシエルだった。

しばらくして、入り口の扉が開く。

そこに、黒髪の、無表情の一人の青年が現れた。

「F級遊撃士、セレス・ランスター。本日より、クロスベル支部に所属いたします」

今、物語の幕が開く。

それは語られなかった物語。

それは歴史に残らなかった物語。

それは存在しなかったはずの物語

「来訪の異邦人」(後書き)

作「さて、これで本編がスタートします」

エリイ(以下：エ)「冒頭のアレは何かしら？」

作「もちろん過去の話です。まあ、物語の核心部分ではありませんね」

エ「そうなの……。そういえば、主人公、結局遊撃士にしたのね」

作「ええ。最初はどこにも所属しないフリーランスとして活動させるつもりだったんですが、色々と無理があったので設定変えました」

エ「なるほど。あと、ヨシユアさんとエステルさん。クロスベルに
いるという設定なのね？」

作「そうです。レンの消息が掴めなかったままとなっています。ちなみに、レンがこの小説に登場するかどうかは未定です」

エ「本編と状況が結構変わっているわね」

作「原作メインが不在ですしね。あ、今は主人公の準備段階です。
一応、碧の軌跡本編の時間軸で物語が進みます」

エ「見事なまでの原作破壊ね」

作「そうですよねえ」

オリジナルキャラ 設定

セレス・ランスター

黒髪、琥珀眼を持つ22歳男性。F級遊撃士。
色は黒が好みで、服装も黒で統一されている。

無愛想で表情の変化に乏しい。

口数も少なく、話が苦手。

実力はあるのだが、とある目的の為、引き受ける依頼を限界まで絞り込んだ為、低ランク。

クビにならなければ、評価などはどうでもいいと思っている。

使用武器は小太刀二刀。

最初に手にした武器がこれだった為、何となく使い続けている。

技は全て我流。

当たり前ですが、裏設定あります。

「オリジナルキャラ 設定」(後書き)

ティオ(以下：ティ)「これ、ほとんどヨシユアさんの設定じゃないですか？」

作「そうですね……。一応、この主人公、別にモデルがいます。詳細は伏せますが」

ティ「そうですか。ところで何か凹んでおられるようですが」

作「ええ……。ある人気作家様の小説と、主人公の使用武器、思いつきかぶりしました」

ティ「それは……。ご愁傷様です」

作「完全にこちらの確認不足でした。もしこの小説を見られましたら、この場を借りてお詫び申し上げます。パクるつもりは微塵もございませんので、どうかご容赦下さい」

ティ「小説の進具合で、設定に補足がかかっていくんですか？」

作「そのつもりでいます。あ、ちなみに、元執行者とか元猟兵という設定ではありませんのでご了承ください」

ティ「最後の一文、いかにも投稿の字数制限をクリアする為に書いてますよね」

作「そうですね」

く唐突の受験生く

「その後の状況はいかがです？」

聞かなくとも結果は分かるのだが。
その女は義務として報告を促した。

「はい。残念ながら・・・あの時以来、特に変化は見られません」

白衣姿の男は、義務として結果を報告。

その顔は、どんな表情も浮かべてはいなかった。

「そうですか。やはり、感情だけでは駄目、ということですね」

あの時は、確かな力の波動を感じた。
目覚める・・・と思っていたのだが。
その力は急速に霧散してしまった。

「試していないことはいくつもあります。薬物の投与、肉体への拷問。許可をいただければすぐ――」

無表情から陰険な笑みを浮かべた男が、その提案を言い終わる前に。
その首がごろりと転がった。

「ふん。汚らわしい」

汚物を見るような目つきで、その男の首を睨みつける。
だが、その陰悪な表情も一瞬で消える。

「そんなこと、出来るわけがありませんわ」

代わりに浮かんできたのは、微笑。

「あの娘は。私の、大事な大事な――」

美しく。

恐ろしく。

冷酷な。

「――お人形^{おにんぎょう}なのだから」

嘲笑^{ちょうしやう}だった。

「さて、早速だけど。受けてもらいたい依頼が何件かあるのよ」

「・・・随分と唐突ですね」

ミシエルの話の切り出しに、セレスは声を上げた。

クロスベル支部が人手不足、とは聞いていたが。

まさか、着任初日で依頼を複数件出されるとは思っていなかったのだ。

セレスとしては、まず市街の状況や住む場所の手配をしたかったところだったのだが。

「アルタイル支部長から話は聞いてると思うけど。残念ながら、人材を遊ばせておく余裕なんてウチにはないの」

「お話は伺ってます。しかし、俺はクロスベルの右も左も分かりません。この状態で複数の依頼をこなすなど、出来るとは到底思えません」

それもある。

しかし、セレスの本音としては、依頼は最小限に抑え『探し物』の情報収集を優先したかった。

「その点は安心して頂戴。貴方に今回依頼するのは、全部魔獣退治だから——貴方の試験も兼ねてね」

ああ、と。

セレスは納得した。

なるほど、初対面なら、遊撃士をランクで評価するのは当たり前だ。つまり——F級程度でクロスベル支部の仕事を任せられるか信用できない、と言っているのだ。

「試されるは構いませんが・・・それは俺一人でやる、という解釈でよろしいですか？」

土地勘がないので、すこし日程が欲しいところだった。

この様子だと、ある程度は真面目に仕事をこなす必要がある。どんな評価をされようが構わないが、使えないと判断されて放逐されるのは拙い。

「目撃情報があるのが・・・東クロスベル街道ね。それなら・・・」
端末でシフトを表示。

それぞれのタイムスケジュールを計算し、同行可能なメンバーを探す。

・・・該当者なし。

「そうね。一人で行ってもらうことになるわ。C級でやっと倒せるっていうレベルの魔獣だから、断ってもらっても――」

「戻ったぞ」「ただいま」

意地悪な笑みを浮かべながら言いかけた時、二人の女性遊撃士が戻ってきた。

泰斗流免許皆伝の遣い手である、リン・セイランと。

医術の心得がある方術士、エオリア・フォリナーである。

「あら、二人とも。早かったのね」

そう、早かった。

ミシエルの予定では、あと2時間は帰ってこない予定だったのだが。

「ああ。エオリアが、今日来る新人に興味があったらしいんだ」

「だって、F級でしょう？どんなヘタレ君が来るのかなって。．．．それで、彼がそうなの？」

失礼なことを言いながら、セレスの方を品定めするように見る。

「顔はまあまあ。でも服装のセンスはイマイチ．．．か。ちえ、童顔だったら可愛がってあげたのにな」

「．．．ご期待に沿えず、申し訳ありません」

会話を切る意味で、とりあえず謝っておいた。

おそらく話したすと止まらなくなるタイプの人間だ。

無駄に時間を使う前に出発した方がいいと判断し、ミシエルに確認。

「では、俺の審査はこのお二人が担当を？」

「そういうこと。依頼を出したのは3匹だから．．．明日の昼までに全て1人で倒して戻ってくることに。それを合格の条件とさせていただきますわ」

「わかりました」

現在13時ちょうど。

期限は一日弱ということになる。

「当たり前だけど、導力バスの使用は禁止。遊撃士たるもの、まずは自分の足で地形を確認すること。これは言うまでもないわね？」

頷く。

地形を確認したいのは山々だし、受験生にはルールに口を挟む権利はない。

徒歩での移動となると、戦闘にあまり時間をかけるわけにはいかないうのだ。

「リンとエオリアには、タングラム門警備隊からの依頼もこなしてもらおうよ。どちらか片方がセレスについていればいいから、時間と相談しながら判断してちょうだい」

「わかった」「うん」

「私からは以上よ。じゃあ、気をつけて行ってらっしゃい」

く唐突の受験生く（後書き）

ランディ（以下：ラ）「山場が全くねえな」

作「そうですね・・・まあ、要はクロスベル支部の遊撃士試験が始まったと思ってもらえれば」

ラ「ほー。それより、俺イチオシのエオリアさんが出てきてるじゃねーか」

作「多分セレスは彼女たちと組むことが多くなるのではないかと」

ラ「何で？」

作「書きやすいからです。ヴェンツェル・スコット組の性能はさっぱり分からないし、ヨシユア・エステル組だとヨシユアとスタイルがかぶるので」

ラ「小太刀二刀流って時点で、手数と速度勝負確定だしなあ」

作「そうですね。次は一応戦闘シーン入れます」

ラ「苦手なくせに・・・自分で首絞めてるよなあ」

作「そうですねえ」

く双刀の遊撃士く

東クロスベル街道。

セレス、リン、エオリアの3人は、歩きながら手配魔獣を探していた。

（・・・小太刀。それも二刀流、か）

小太刀——通常の打刀よりも丈が短い為、軽く取り回しの効く刀である。

それ自体は珍しい物ではないし、二刀流の流派も少数ではあるが存在する。

だが、前を歩くセレスを見て、リンは疑問に思った。

「セレス、少し聞きたいことがあるんだ」

「・・・何ですか？」

「君はなぜ、小太刀を『背負って』いるんだ？」

二刀流の使い手は、刀を腰の後ろに交差させて差すのが普通である。だが、セレスは背中に刀を垂直に互い違いに差していた。

この場合だと、首の裏から右手で一本、腰から左手で一本を抜く形となる。

自然、右手の小太刀は順手、左の小太刀は逆手で握ることになるのだが。

左手の逆手は、弱点となりかねないのだ。

人間の手首の構造上、刀は逆手で扱うものではないからだ。

手首の柔軟さを活かしきれず、斬撃の速さ・キレは落ちるし、攻撃

射程は短くなり、太刀筋も限定される。
リンはそれを指摘したかったのだ。

「・・・俺に合っていたのがこの差し方だった。それだけです」

それだけを言つて、セレスは歩き出す。

その指摘は正しく、セレスも最初は交差差しをしていた。

しかし、逆手による利点——左側面から後方及び下方の防御がし易くなるというメリットが必要だった。

そうしなければ生き延びれなかったのだ。

しかし、セレスにはそれを説明する気がなかった。

「・・・そうか」

少し釈然としなかったが、特に追求をせず、リンも話を打ち切る。
そして、再び魔獣を探し始めるのだった。

「いたぞ。アイツだ」

リンのその言葉に、セレスは振り向き、その姿を確認。
そこにいたのは・・・3匹のサベージホーンだった。

発火性のある鼻息を吐き、弱った相手をその角で串刺しにする獰猛な魔獣である。

「さて、もう一度試験内容を確認しておくぞ」

その言葉に頷きながら、アナライズ解析を発動。

彼を知り、己を知らば、百戦危うからず。

解析結果は・・・間違いない、変異種だ。

「基本的に戦うのは君一人だ。もちろん、無理だと判断したら、私もエオリアも手助けはするが、その場合は不合格の判断を下す。いいね？」

「はい」

「では、お手並みを拝見させてもらおうか」

「ま、死なない程度に頑張ってね。回復のアーツや薬品は万全だから」

回復の準備が万端なのはありがたいのだが・・・やっぱり信用はされていないようだ。

二人とも、目が笑っている。

さて、何をやらかしてくれるのか、という期待の籠った目である。
簡単に言っていると嘗められているのだ。

(・・・さて、どうするか)

一番いいのは、ある程度時間をかけて倒す方法だろう。だが、今回は手配魔獣討伐がこれを入れると3件もある。

今回の様に、あっさりと他の魔獣が見つかる保証などないし、制限時間までつけられているのだから、今回は却下だ。

適当に苦戦を装いながら倒す方法もある。

だが、どの程度の傷で手助けが入るのかの判断が付かないし、手を抜いているのがバレるのも拙い。

一つ一つの依頼に手を抜くと思われれば、それだけで不適正と取られてしまうかもしれない。

ならば——あまり気は進まないが、最初の一手で瞬殺するしかないだろう。

中途半端に倒して逃げを打たれる訳にもいかないので、まずは自分を囲ませ、3匹がまとめて突進してくる状況を作らなければならぬ。

「あ・・・ちよつと？」

小太刀を構えるわけでも、まして抜いてもいない状態でサベージホーンの群れに歩くセレスを見てエオリアが声を上げる。
当のセレスは無視。

サベージホーンはセレスに気づき、セレスを囲みこむように旋回を開始した。

「ちよつと、リン。あの子大丈夫？」

「あれだけ無防備で突っ込んだんだ。何か考えがあるんだろ。私にはわからないが」

念のため、いつでも飛び出せるようにその戦闘に意識を集中する。
そして、サベージホーンがセレスに向けて一斉に炎の鼻息を発射する。

三方向からの攻撃には、逃げ場は上空にしかない。

セレスは跳躍し鼻息を回避し、リン達と丁度反対側に着地。

その着地地点目掛けて、3匹のサベージホーンが突進していく。

——イン！

「え・・・」

リンにもエオリアにも見えなかった。

気がついた時には、三匹のサベージホーンはそれぞれが首のない死骸となって倒れており。

セレスは刀身についた血糊を拭き取っているところだった。

「君、さっき何したの？」

サベージホーンを倒し、次の手配魔獣を探している途中。

よほど気になっていたのか、エオリアはセレスに倒した時の状況を質問した。

「ただの走り居合いですが・・・？」

それを聞いて、リンは絶句。

居合いとは、刀を抜く際の鞘走りを利用し、通常よりも斬撃威力及び速度を上昇させる技である。

しかし、静止した状態から強い踏み込みを行うことでようやく出来る技であり、断じて走った状態で出せるものではない。

さらに言うと、居合いとは本来後の先返し——つまり待ち技である。先手を取る技ではないのだ。

そして、居合いとは両手で行うものであり、本来出せる威力・速度を上回る斬撃を出す。

それ故に、その斬撃のコントロールはほぼ不可能であり、撃った後は完全に無防備状態である。

つまり、複数を相手に使うべき技ではない。

(・・・だが、そんなことよりも)

確かに、技自体は見えなかった。

だが、技に移行する前のセレスの目ははっきりと見えた。それには、

純粹で、

冷酷な——殺意の光が宿っていた。

(・・・考えすぎか)

相手が魔獣だったからと。
そう納得したリンだった。

結局、依頼されていた魔獣退治は、その日の夜には全て討伐を完了。
セレスは見事試験に合格し、晴れてクロスベル支部の遊撃士と認め
られた

『双刀の遊撃士』（後書き）

口「戦闘シーン、やけにあっさりとしてるな」

作「主人公の背景設定上、ある程度強くしないといけなかったの・
・相手がモブということもあり、瞬殺とさせていただきました」

口「どのくらいの強さに設定したんだ？」

作「あまり具体的には言えませんが・・とりあえず、特務支援課
のメンバー個人個人よりは強いです」

口「なるほど・・何か今回は説明臭い文章になってるな」

作「そうですねえ」

やっぱり誤字発見につき修正しました

く邂逅の散策行く 前編

翌朝。

セレスは一日だけ休みをもらい、クロスベル市街を歩いていた。市街の全体把握と住居を探すことが主な目的である。

手持ちのミラでは、あとせいぜい2〜3泊しかすることが出来ない。

(・・・まずは住居の手配から、か)

住宅の斡旋などは、市庁舎の管轄であるのだろう。そう考えて、セレスは行政区に移動するのだった。

「~~~~~」

フラン・シーカーは上機嫌だった。

原因はもちろん、隣を歩く彼女の姉ノエル・シーカーである。

仲のよい姉妹なのだが、姉は警備隊。妹は警察。

働く場所が違うこと、特に姉の警備隊の仕事は基本的に休みを取れず、なかなか一緒にいることが出来ない。

今日はクロスベル創立記念祭以来の姉とのデートである。

「ちょっと、フラン。何で腕を組もうとしてるのよ」

「別にいいじゃない。私とお姉ちゃんの仲でしょ」

「全くもう・・・」

弾けるような笑顔と、呆れたような、それでも嬉しそうな笑顔。そういえば、笑顔になるのは久しぶりのことだとノエルは思った。フランもきつとそうなのだろう。

こうして腕を組んでいると、今はもういない『彼』のことを思い出してしまった。

(・・・ロイドさん・・・)

ノエルは、彼と行動を共にした時間はそれほど長くはなかった。星見の塔と月の僧院の調査を依頼し、共に調査したこと。タングラム門の合同訓練で手合わせをしたこと。

そして、創立記念祭で女性に振られた(勘違い)彼を、妹と一緒に連行して一日を遊び倒したこと。

このくらいである。

でも、それだけで、ノエルは彼を意識するようになった。

優しい笑顔を持つ男性だった。

強靱な意思を持つ男性だった。

揺るがぬ正義感を持つ男性だった。

だから、他のメンバーと共に、彼の変わり果てた姿を見た時。

彼女はショックで倒れ、復活するのに一週間を要した。

一ヶ月という時間が過ぎ、何とかいつも通りに振舞うことが出来るようになったが、まだまだ割り切れていないものがある。

おそらく、フランも同じだろう。

「・・・お姉ちゃん？」

いつの間にか妹に顔を覗き込まれていた。

考え事をしているうちに、表情が険しいものになっていたようだ。

これはいけない、と頭を振るノエル。
折角の休日だ。

楽しまなければバチが当たる。

「ああ、ごめんね、フラン。何でもないよ・・・あれ、セレスさん？」

妹に微笑みかえ、視線を移動したところには、見覚えのある黒尽くめの男性がいた。

「・・・ああ、こんにちは。ノエル曹長」

「あれ、この人。お姉ちゃんの知り合い？」

「うん。新人遊撃士のセレスさん。昨日知り合ったの」

結局、セレスの魔獣退治は夕方には終わっていた。

折角だからと、リンとエオリアの依頼にそのまま同行し、タンゲラム門で顔を合わせたのだ。

「そうなんだ」

フランはセレスに向き直り、

「始めまして。ノエル・シーカーの妹、フラン・シーカーです。今後よろしく願いしますね」

「遊撃士セレス・ランスター。どうぞよろしく願いします」

「そういえば、セレスさん。今日はお休みなんですネ」

「私達、これからお昼ご飯なんですよ。よければ、セレスさんも一緒にどうですか？」

一般的に、警察と遊撃士協会はあまり仲がよろしくない。

市民からの支持が遊撃士協会に向いていることで、警察の上層部が毛嫌いしている為だ。

少し前までは、特務支援課が橋渡しの存在となっており、少しずつ関係は修復していたのだが。

その特務支援課が消滅したことにより、再び以前の険悪な関係に戻ってしまった。

しかし、それはあくまで上層部のメンツの問題であり、現場レベルになるとそこまでの軋轢はない。

フランは特務支援課のオペレーターをしていたこともあり、遊撃士と接することに抵抗感はなかった。

「・・・お誘いはありがたいのですが。姉妹水入らずにお邪魔するのもどうかと」

「えー。私達は全然構いませんよ？ねえ、お姉ちゃん」

「そうですね。遊撃士の方のお話ってあまりじつくりの聞いたことがなかったので、セレスさんがお嫌でなければいかがですか？」

(・・・ふむ)

その誘いに、セレスは今後の予定を考えた。

今日するべきことは、住居の手配と、市街の散策だ。

市庁舎に行けば、街の地図くらいは置いてあるだろう。

つまり、市庁舎に到着さえすれば、散策にかかる時間はそれ程多く

はない。

それに、自分はこの街の人脈はほぼない状態と言ってよい。

ここで彼女達と友好関係を築けば、色々な情報も入手しやすいのではないか。

どうしてもその誘いを受けなくてはならない、ということはないが、逆に断る理由もないのだ。

「分かりました。ご一緒させていただきます」

断る理由がないなら、誘いは受けておいた方が損はないだろう。

そう考えて、セレスは了承し、昼食を取ることにした。

中央通りにあるカフェレストラン　ヴァンセット　での昼食はなかなかには有意義な時間だった。

もちろん話しても構わない程度の内容なのだろうが。

姉のノエルからは警備隊について。

妹のフランからは警察について。

それぞれから、ある程度突っ込んだ情報を入手することが出来た。

それと、一月前までは存在した、警察の特務支援課という部署についても話してくれた。

ただし、彼女たちはその特務支援課についての話をする時は辛そうな顔をしていた。

辛いことを思い出させたお詫びの意味を兼ねて、リベールやカルバードの話をする、彼女たちは喜んで聞き入ってくれた。

「それじゃ、セレスさん。私達はそろそろ失礼しますね」

「ごちそうさまでした、セレスさん」

「お二人とも、お氣をつけて」

会計は自分が持ち、二人を見送る。

二人とも、少しだけ無理をしていたようだが、それでも素敵な笑顔を浮かべていた。

とても仲のいい姉妹だった。

（・・・姉妹、か）

二人が去っていった方向を見てセレスは目を細める。
その表情は、少し寂しそうだった。

く邂逅の散策行く 前編（後書き）

エ「話が進んでないわね」

作「オリキャラと原作キャラの接点作りが難しいですね・・・今更ながら、オリキャラ小説の難しさを痛感しています」

エ「私達もないから、一から作り直さないといけないのよね」

作「ですね・・・それにしても、長い文章が書けなくなりました」

エ「まだ本編の時間軸にも到達してないわね・・・」

作「そうですねえ」

く邂逅の散策行く 中編

ノエル達と別れ、セレスは行政区にある市庁舎を訪れていた。

「・・・斡旋できる住宅がない、ですか・・・」

「申し訳ございません・・・」

セレスの落胆の声に、受付嬢のシオンは頭を下げる。

（参ったな・・・）

ホテルでの宿泊はあと2回が限界である。

野宿、という手段もなくはないが、依頼をこなす為の体調面、衛生面から見ても遠慮したいところだった。

遊撃士の同僚の家に泊めてもらうという手段も現状では難しい。

リンとエオリアは女性なので論外。

他の遊撃士とは顔を合わせてすらいらないからだ。

（・・・やはりミシエルさんに相談してみるか）

大きな街だからと油断していた。

出来れば自分のアパートが欲しかったが、仕方がない。

しばらくの間、ミシエルの家に泊めてもらおうと考え、セレスはお礼を言ってお立ち去ろうとした。

その時。

「お待ち下さい、お客様。私ではお勧めは出来ませんが、一件だけご紹介可能な物件がありました」

「どんな物件ですか？」

「中央広場の一画にございますビルで・・・築30年と古い建物で
はございますが」

「導力は使えますか？」

「はい。導力はご利用になれます。元々は宿舍として建てられた建物
なので、キッチン等は1階にしかございませんが」

セレスとしては、最低限雨風が凌げればそれで十分だった。
さらに導力が使えるとなれば、建物がいくら古かろうが問題はない。

「わかりました。敷金はいくらになりますか？」

「現在は市が所有する建物なので、敷金は必要ございません。賃貸
料と導力使用料についてですが――」

その後、セレスは契約についての様々な説明を受けた。
諸経費については、依頼を数件こなせば支払えるものだった為、そ
の場で契約。

こうして滞在拠点を手に入れることができたのだった。

港湾区、東通りと周り、旧市街に到着。

(・・・随分と寂れているな)

歓楽街や中央広場など、華やかな場所を先に訪れたせいだろうか。建物の老朽化や破損が散見しているこの場所が、特に物悲しく感じられた。

だが、これも世の中の縮図の一つなのだろう。

繁華街などの輝きが増す一方で、こうした裏路地の影が濃くなる。物事には、必ず裏表があるのだ。

(・・・ん?)

かすかにだが、怒号のようなものが聞こえた。お世辞にも治安がいいとは言えなさそうなこの場所のことを考えると、強盗や恐喝だということも考えられる。

(・・・急ぐか)

聞こえていなければ放つとくのだが、聞こえてしまったものは仕方がない。

セレスはため息をつきつつ、声が聞こえた方に走っていった。

駆けつけた先には、予想は外れたが想定内な出来事が起こっていた。

「オラァッ、食らえっ」

「くっ・・・」

「ヒヤッハーハー！死んじまえよオッ」

「まだまだっ」

見紛う事なき不良達の喧嘩である。

どうやら、赤と黒のジャンバーの集団と、青い服の集団で争っているらしい。

だが、釘バットやら木刀やらスリングショットやら、使い方によっては大怪我に繋がる武器を少年たちは使用していた。

寸止めする技量も心構えもあるようには見えず、何故かギャラリーには小さな子供達までいる。

当人達が怪我をしようが知ったことではないが、周囲にまで影響が出そうな様子だった為、強制介入をすることにした。

「その喧嘩は俺が預かる。今すぐ戦闘を中止しろ」

その声に、その場にいた不良たちはセレスを見やった。

「あぁん！？何だデメエは！」

「遊撃士協会の者だ。素手での喧嘩なら大目に見なくもないが、武器を使用するの喧嘩は看過することは出来ない。双方ともさっさと引き上げるがいい」

「ハン、こちらら警備隊とも遣り合っただよ。邪魔するならデメエから潰すぞ、コラ」

「自信を持つのは結構なことだが・・・あくまでやるつもりなら少し眠ってもらうことになるぞ？」

そう言つて、無表情のままその不良に向けて軽い殺気を放つ。
それを感じ取ったのか、その不良をビクッと震えて尻餅をついた。
なるほど、今の殺気を感じ取れるなら、なかなか筋はいいようだ。
その不良達が何も言えなくなったところで――

「ケツ。白けちまったぜ・・・」

がっしりとした身体の男が前に出てきた。
どうやら不良達の片割れのリーダーらしい。

「オイ、ワジ。今日はこの辺が潮時みたいだぜ」

「フフ、そうだねヴァルド。こんな小競り合いで補導されるのもバカバかしいし、今日はここまでにしておこうか」

緑色の髪の青年がもう片方のリーダーということだろう。
さすがリーダーと言ったところか。
引き際はしっかりと心得ているようだ。

「よし、テメエら、引き上げるぞ!」

「……ウツス!」

ヴァルドという男の声に、ジャンパー姿の不良達が応え、引き上げていく。

ヴァルドのカリスマ性がそうさせるのか、見かけによらず統率が行き届いていた。

「テストメンツ、撤収!」

「……了解！」「」

ワジという青年の声に、残った青服の少年達が応える。

こちらもどうやらリーダーの統率が行き届いているようだ。

宗教がかった服を着ているが、どうやら普通の少年たちのようなのだ。

「ああ、そつだ。お兄さん」

引き上げる途中で何かを思い出したように、ワジがこちらに向かってきた。

「……何か？」

「お兄さん、名前は？」

「人に名前を尋ねる時は、まず自分から名乗るのが礼儀だと思うが」

「僕の名前はさつきヴァルドが言ってたじゃない……まあいいや。僕はワジ・ヘミスフィア。さつき見たとおり、『テストメンツ』って不良チームの頭やつてる。以後お見知りおきを」

「セレス・ランスター。さつきも言ったが、クロスベル支部所属の遊撃士だ。用件はそれだけか？」

「セレスって面白そうな人だからさ。気が向いたら、この旧市街の東側にある『トリニティ』っていうプールバーに顔を出しなよ。僕は大概そこにいるからさ」

「未成年がバーに入り浸るのもどうかと思うが。・・・まあ、覚えておこう」

「フフ。それじゃあ、世の中色々と物騒だから気をつけてね、セレス」

そう言つて、ワジは立ち去っていった。

なにやら食えない印象はあるが・・・彼からも『探し物』についての情報を引き出せるかも知れない。

セレスはそう考えて、暇があれば『トリニティ』に顔を出してみようと思うのだった。

「邂逅の散策行」 中編（後書き）

ティ「今回はワジさんが出てきましたね」

作「シチュエーションが零本編と似てしまいましたね。シチュエーションは色々考えたんですが、やっぱりこれが一番しっくり来ました」

ティ「主人公が契約した建物って、やっぱりアレでしょうか？」

作「ええ、アレです。経緯とかは、本編で説明・・・できるということです。無理そうだったらこちらで書きます」

ティ「そして今回が中編・・・次でラストですか」

作「一応そうなります。ただ、次の後編はちょっと難産になるかも知れません」

ティ「それはどういうことでしょう？」

作「次の展開の案が複数ありまして、場合によっては主人公の環境がガラッと変わってしまいそうなんです」

ティ「今の言い方で、次の展開が予想できた人いそうですね」

作「そうですねえ」

く邂逅の散策行　後編

一通り市街を見回った時には、すでに日が暮れ、導力灯が煌々と輝いていた。

（・・・クロスベル。眠らない街・・・か）

色とりどりに輝くネオンに、夜になっても一向に減らない通行人。リベールやカルバードのどの都市よりも繁栄している。

しかし、その裏では、カルバード共和国・エレポニア帝国という二つの宗主国を持ち、その利権争いの渦中にある不安定な都市でもある。

以前は？ルバーチエ商会？という組織が裏社会を牛耳っていたが、先月に消滅し、これからは？黒月？という貿易会社が勢力を拡大しそうだ・・・という話も聞こえてきた。

（・・・そろそろ戻ろう）

情報収集に時間がかかった為、契約した新しい住居にはまだ足を踏み入れていない。

家があるのに野宿するというサバイバル精神は持ち合わせていないし、徹夜した状態でこなせるほど遊撃士の仕事は甘くないのだ。

ひとまず、本日の情報収集はこれで打ち切り、明日に備えることにしよう。

そう考えて、セレスは新たな住処へと歩いてゆくのだった。

パチン

スイッチを押し、室内に明かりを点ける。

奥の部屋が台所なので、間取り的にはリビングになるのだろう。

セレスには持ち運んだ荷物がなかったので、最低限の家具すら揃っていないかった。

酷く殺風景な部屋・・・のはずなのだが、セレスは不思議と暖かいものを感じた。

(・・・ふむ)

それが何か、というのを考えようとしたが、答えが出なさそうだったので止めた。

頭の隅に追いやり、まずは建物の全体の間取りを把握することにする。

1階部分はリビング、台所、応接室。

2階から3階は、個室が4部屋ずつ。

4階が屋上となるようだ。

築30年とのことだったが、造り自体はしっかりしている。

これなら、拠点としては文句はなかった。

ボタン！

屋上から室内に入った所で、階下からドアを開ける音が聞こえた。

(・・・?)

市庁舎の受付嬢は、この建物は今のところ無人だと言っていた。そして、セレスは住所の決定を遊撃士協会には連絡していない。

つまり、ここを訪ねる人間などいないはずなのだが。
不思議に思いながらも、セレスは階段を下りていくのだった。

階段を下り、1階に到着。

そこには、白いワイシャツにサスペンダー付きのズボンを履いた髭面の男がいた。

知らない男だった。少なくとも、セレスの記憶にはこの男の姿はない。

強盗ではなさそうだった。武器を携帯していない。
自分が契約した後に契約した人なのだろうか。

「・・・こんばんわ」

ひとまず話をしてみようと思い、男に声をかけた。

その声に男はこちらを振り返り・・・落胆の表情を浮かべる。

「・・・ああ、そうだよな・・・。あいつらが帰ってくる訳がなかったな・・・。」

こちらの挨拶に構わず、その男は俯きながらそう呟いた。

相手は何やら納得しているが、こちらにはさっぱり事情が分からない。

とにかく、状況を把握する為、再び声をかける。

「・・・もしもし？貴方はどなたですか？」

この言葉に、男は顔を上げる。

「ああ、すまねえな。俺はセルゲイ・ロウってモンだ。あんたは？」

セルゲイ・ロウ。

その名前には聞き覚えがあった。

昼間にシーカー姉妹から聞いた話の中に、その名前が出てきていたはずだ。

確か、クロスベル警察の特務支援課の課長の名前だったと記憶している。

「俺はセレス・ランスターです。こちらにはどういったご用件で？」

クロスベルに来てからは、特に警察に目を付けられるような真似はしてないはずだった。

痛くもない腹を探られるのは面白くない。

「元々ここに住んでいたもんでな……。出て行ってからずっと無人だったから、明かりが点いていたのが気になってな」

普通なら、出て行っただ後の建物に明かりが点いていたぐらいでは踏み込んで来ないだろう。

だが、セルゲイさんはここに住んでいたと言っていた。

そして、シーカー姉妹は、特務支援課は警察署には分室がなく、中央広場の一角にあると言っていた。

つまり、この建物が特務支援課の分室だったということなのだろう。そして、特務支援課は、課長以外のメンバー全員が殉職したと聞いている。

そんな状況を経て、出て行っただビル建物の明かりが点いた……。死者が甦って帰ってきた、という幻想に縋ってしまったのだろうか。

「市の所有物件として契約しましたが・・・その事はご存知では？」

「知ってはいたんだがな・・・」

そう言つて、煙草に火をつける。

ふう、と煙を吐くその様は、どこか哀愁が漂っていた。

考え事をしているのか、そこから無言。

セレスも声をかけることはせず、少しの間沈黙が広がった。

「そういえば、セルゲイさん。食事はもうお済みですか？」

「あん？」

こちらからの誘いに、セルゲイさんは訝しげな表情を浮かべる。

見ず知らずの人間からのいきなりの食事の誘いなのだから、無理もない反応だ。

だが、警察関係者・・・元特務支援課の課長との縁を、このまま切ってしまうのはいささか惜しい。

情報を引き出すことは難しいだろうが、友誼を深めておくに越したことはないだろうと判断した。

「いえ、遊撃士をやっている身としては、人脈はあるに越したことはないのです。もちろん、お代は俺が持ちますが」

そう言つて、遊撃士手帳を取り出し、セルゲイさんに見せる。それを見て、セルゲイさんはくくつ、と笑った。

「遊撃士……。そうかそうか。アリオスは元気にやってるのか？」

「クロスベルには昨日着いたばかりなので、生憎と俺はお会いしたことはありませんが……」

「成程。それ故に人脈が欲しいと」

「ええ。とりあえず、顔と名前を覚えてもらえればそれで十分です」

「俺のことはどこからか情報は得ているということか。……いいだろう、誘いに乗っかってやる」

セルゲイからは、自分の事に関係する話はほとんどしていない。

そして、ただの一般人が相手なら、ここまでして繋がりを求める必要はない。

それをするということは、セルゲイ・ロウという名前とある程度の経歴は相手に割れている、ということだった。

「では、行きましょう」

そう言って、セレスとセルゲイは街に繰り出していく。

その日、セレスが帰ってきたのは、日付が変わった後のことだった。

「邂逅の散策行」 後編（後書き）

しばらく間が空いてしまいました。

ビルについては、特務支援課が解散した後、不要ということになり、警察が市に売却。

オルキスタワー建設の方に力を入れていたため、取り壊しが遅れに遅れ、仕方なく賃貸アパートとして扱い放置していたという設定です。

今回の話は、自暴自棄になっていたセルゲイ課長をセレスが叱咤し、その過程で新しく支援課を立ち上げ、セレスをメンバーに引き抜く・．．という展開も考えたのですが、見ず知らずの男に説教されるセルゲイさんというのもカッコ悪いし、それをやると、原作メンバーをセレスに置き換えるだけになってしまう為見送りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5434y/>

全てを零へ・・・ ~ Prerude of Zero ~

2011年12月2日18時48分発行